

# 新指導要領とコミュニケーション

松坂 ヒロシ

あることに気づくまでに何年もかかった、という経験をもっている人は少なくないようです。どなたかのエッセイのなかで、浦島太郎の歌の歌詞、「帰ってみれば、こは如何に」の、「こは如何に」が、「怖い蟹」である、と子供のころ思い込んでしまい、大きくなってからやっと間違いに気づいた、という話を読んだ記憶があります。私自身の恥を申し上げると、「類は友を呼ぶ」と訳されるあの英語のことわざ 'Birds of a feather ...' を高校時代に覚えましたが、なぜ「類」の意を feather で表すのかという疑問を何年ももち続けました。feather が、ことわざの最後の単語 together と韻を踏んでいることに気づいたのは、学校を出て教師になってからでした。

これと似たようなことが、日本の英語教育界において、コミュニケーションという語の意味について起こったのではないかと、いう気がします。オーラル・コミュニケーションという科目名が高等学校学習指導要領に登場したころ、コミュニケーションがリーディングや文法教育の対立概念として使われるのを耳にすることがありました。たとえば、「コミュニケーションのほうはネイティブの先生におまかせして、こちらはもっぱら文法や訳読をやる」「受験指導が忙しくて、コミュニケーションの指導に時間が割けない」のような言い方で、英語の授業の方針や教師の役割分担が説明されるのを聞きました。コミュニケーションという語に対するこのような意味づけは、その後、必ずしも完全に消えることはなかったように思います。われわれ英語教師の意識のなかで、「コミュニケーション」という言葉と「オーラル面の教室活動」とが、特別に結びついてきたように思います。

\*

新指導要領において、旧来の「オーラル・コミュニケーション」がなくなり、新たに「コミュニケーション英語」という科目が出現しました。これによ

り、上記のようなおかしな連想は、急速に過去のものになっていくでしょう。コミュニケーションは、当然、オーラルでないコミュニケーションも含まれます。当然、書かれた言葉によるコミュニケーション、会話調でない、かたい表現によるコミュニケーションをも含みます。新指導要領の科目の立て方は、このことを、今後、われわれ英語教師に明確に意識させることでしょう。

私は、コミュニケーション英語Ⅰの教科書 *POLESTAR English Communication I* の編集に参加しました。この教科書のなかから、過去においてあまりコミュニケーションと結びつけて考えられなかったけれども、本来のコミュニケーションに含まれるはずである、というたぐいの情報の例を、ご提示したいと思います。

あるレッスンで、探検家であり写真家である石川直樹氏が取り上げられています。「大学入学後、直樹は休暇を利用して旅行を続け、写真に対して真剣に興味を抱くようになった。彼にとって写真は単に旅行の記録なのではなく、ものを発見する方法であった。旅行から戻ると、彼は、自分が写した写真を見て新しい発見をした」とレッスン本文にあります。引用部分の最後の、「写真を見て発見をした」というくだりの元の英語は、'... he would look at his photos and make new discoveries.' です。この would の用法は、辞書の would の項に見つけることができます。この would の働きは、「(過去に)よく～したものだ」という意味を表す、というものです。

さて、私がコミュニケーションなるものに含めたことは、ここから先に申し上げることで

「過去によく～した」と言いたければ、動詞の過去形に often をつければいいはず。すなわち、'... he often looked at his photos and made new discoveries.' と言えばいいはず。教科

書の文章は、しかし、そうっていない。‘would look ... and make ...’となっている。would は、それでは、いったい何を伝えているのか、という問題を考えてみましょう。

もし仮に、この文章が報告書や学術論文だったとしたら、このような would は出てくるでしょうか。イエスかノーかの二者択一で考えるのは乱暴かもしれませんが、どちらかの答えを出すとするれば、答えは否でしょう。「彼は、自分が写した写真を見て新しい発見をした」という事実を、何の感情も入れず事務的に伝えるとしたら、動詞の過去形で十分であり、実際、その表現が使われるはずで、would は報告書や学術論文の調子には適さない表現と言えましょう。(報告書や論文に絶対にこのような would が出てこない保証するつもりはありません。ここでは、そうした文章の典型的な「調子」には would があまり合わない、と申しているだけです。)

では、would に込められた気持ちは何なのか。

私は、「物語」という言葉でその気持ちを説明したいと思います。誰かが物語を語っているのです。報告書の基本的役割は、物語を語ることではありません。事実をストレートに述べることです。石川直樹氏のレッスンの文章は、報告書の文章ではない。学術論文の文章ではない。このこと、すなわち文章の種類についての情報を、would は伝えています。

\*

コミュニケーションという言葉が、何年ものあいだ、時としてゆがめられて解釈されたのではないかと冒頭に申しました。この原因のひとつに、この英語が日本語に訳されることがあまりなかった、という事実が挙げられるかもしれません。英語のままでは、それが何のことだかわからない、という人がいてもおかしくないでしょう。

コミュニケーションの意味は、会話でもなく、話し言葉でもありません。その意味は、単に「伝えること」に過ぎません。漢字の熟語のほうがよければ、「意味伝達」と言っただけではいかがでしょうか。

いま述べました、石川直樹氏についての文章の「調子」が正しく読者に伝わることも、「意味伝達」の重要な側面です。この側面が抜け落ちて、ただ、「彼は写真を見て発見をした」という、いわば論理的な命題のみが伝わったとしたら、コミュニケーションは完全に成立したとは言えません。なぜなら、

文章の調子がどんなものかも、情報として書き手によって発信されているからです。

コミュニケーション英語という科目の目的は、文字どおり、コミュニケーション、それも、曲解されたものではなく、本来のコミュニケーションの訓練であるはずで、この目的を達するために、われわれは、生徒に、文章をしっかりと読ませ、その意味を、欠落なしに把握させる努力をしなければなりません。

何だ、それでは、コミュニケーション英語という新しい科目ができたと言いつつ、英語の授業は昔ながらのリーディングの授業になってしまうのではないか。そうおっしゃる方がいらっしゃるかもしれませんが、このようなご指摘があったとすれば、私は、それに対して、次のようにお答えしたいと思います。

前述のとおり、リーディングの訓練はまさにコミュニケーションの訓練の重要部分をなしています。この意味において、今後とも、昔ながらの教室作業の意義は色あせていません。

一方、文章解釈の中身や位置づけについては、新しい考え方をする必要があるのであります。かつて、一部のリーディングの授業において、英文和訳が目的化する傾向がみられました。このような授業においては、和訳の際に中心的な問題にはならないような事柄、たとえば前述の would の伝える情報などは、話題になりませんでした。ある表現が、どんな場面で使われる可能性が高いか、という問題は、重要視されませんでした。かたい表現とくだけた表現との差にも、あまり光が当てられませんでした。また、文章を読んだ後で、それについて口頭で何かを述べたり、それについて何かを書いたりする作業にも、時間は使われませんでした。

われわれが今後目指すべきは、リーディングを含めた、4技能すべてにわたる意味伝達、また、書き言葉を含めた複数のスタイルの英語による意味伝達です。すなわち、昔ながらの教室作業が、昔ながらではない新しい枠組みのなかに位置づけられたとき、われわれの仕事が成功したと言えると思うのです。

新指導要領の新しい科目名を、私はこのように「リーディング」したいと思います。

早稲田大学教授  
(POLESTAR English Communication I 代表著者)